中田千穂子

第11回 ベルリン・ムジークフェスト2015

今年の主要テーマはシェーンベルク、マーラー、ニールセン

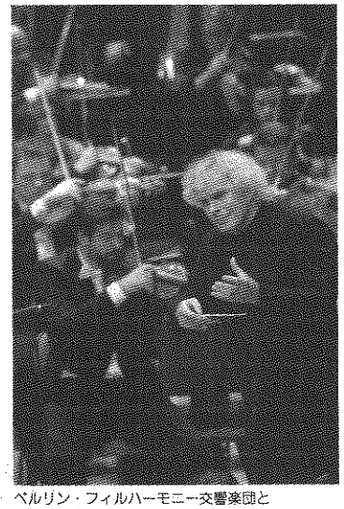
ベルリンの秋のオーケストラの祭典、ベルリン・ムジークフェスト2015は、9月2日から20日まで、主にフィルハーモニーで開催された。この19日間にベルリンの6つのオーケストラはもとより、ティルソン＝トーマス指揮サンフランシスコ響、ネルソンス指揮ボストン響、メータ指揮イスラエル・フィル、ロト指揮SWR響、セナゴー指揮マーラー・チェンバー管、ドホナーニ指揮フィルハーモニア管、ボーダー指揮デンマーク王立管、ハーディング指揮スウェーデン放送響に器楽・ヴォーカルのアンサンブルを合わせて30団体が出演。アルノルド・シェーンベルク、グスタフ・マーラー、カール・ニールセンを主要テーマにして25人の作曲家の70作品が演奏され、音楽祭に訪れた聴衆の数は3万6千人に上った。

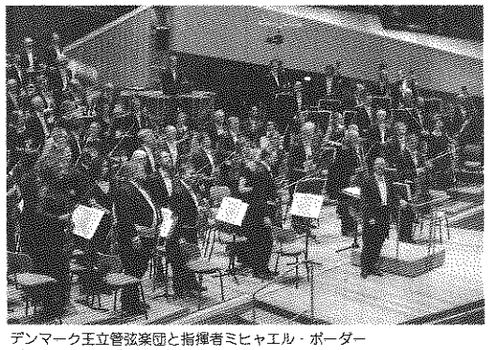
開幕コンサートはダニエル・バレンボイム指揮ベルリン・シュターツカペレで、調性から自由な音楽の扉を開き、更に新しい響きの世界を繰り広げたシェーンベルクを讃えた純シェーンベルク・プログラム。デーメルの同名の詩に基づいて作曲された「浄められた夜」（1874／1951）は弦楽合奏版で大きく孤を描くように情熱的に演奏され、「5つの管弦楽曲」（1909）と12音音楽による「オーケストラのための変奏曲」（1926／28）では透明感溢れる精巧な演奏であった。

エマーソン弦楽四重奏団のシェーンベルクの「弦楽四重奏曲第2番」（1908／08）では幻想的な詩人シュテファン・ゲオルゲの詩を基とした第4楽章「忘我」の導入部のpppからして現実を忘れさせる名演で、ソプラノのバルバラ・ハニングの歌唱も的確であった。ネルソン指揮ボストン交響楽団のマーラーの「交響曲第6番」（1903／04）ではルクソスな響きで生気に満ち満ちた演奏であったが、表現が深みに欠けハンマーを叩きつけるフィナーレも外面的な激烈さで終わった。

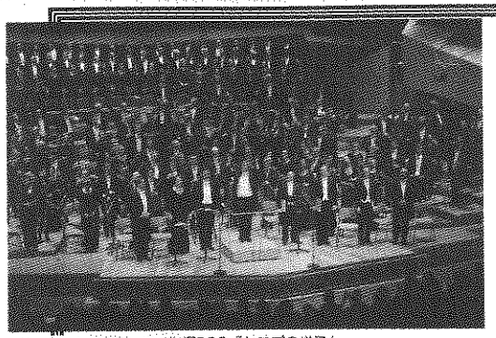
ダニエル・バレンボイムとベルリン・シュターツカペレ
（©Holger Kettner）

デンマークを代表する作曲家カール・ニールセンの生誕150年に因みニールセンの作品も多くプログラムに組まれた。ミヒャエル・ボーダー指揮デンマーク王立管弦楽団により、珍しく2楽章からなるニールセンの「交響曲第5番」（1921／22）が演奏された。軍隊調の小太鼓を用いたマーチや厳格なフーガが繰り返され、闘争で殺伐とした心を癒す様なクラリネットのソロも卓越していた。「広がり」のサブタイトルで知られる交響曲第3番（1910／11）はマレク・ヤノフスキー指揮RSBのコンサートで演奏され、デンマークのフューネ島の長閑な田園風景を髣髴とさせた。「不滅」のサブタイトルで有名な、多調性を基にした「交響曲第4番」（1914／16）はサイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルにより演奏された。2群のティンパニの〝決闘〟が展開する第4部終了後の、元楽器奏者ラトルの爽快な笑顔が印象深い。


ベルリン・フィルハーモニー交響楽団と首席指揮者サイモン・ラトル
（©Monika Rittershaus）


デンマーク王立管弦楽団と指揮者ミヒャエル・ボーダー
（©piero chiussi）

頂点に達したのはメッツマハー指揮DSO（240名）、語り手と独唱者計8名、ベルリ放送合唱団によるシェーンベルクのオラトリオ「ヤコブの梯子」（1915／22）のコンサート形式による上演。テキストもシェーンベルクによるものだが未完の作品。お仕舞に舞台上のオーケストラと、高みの4ヵ所に配置された楽器小グループと二人の高いソプラノが対応し、かつてユダヤ民族の族長ヤコブが夢に見たという天に昇る梯子さながらに演奏され、演後熱狂的な喝采が浴びせられた。


インゴ・メッツマッハー指揮DSO「ヤコブの梯子」
独唱者たちとエダ・モーザ（死人）他（©Kai Bienert）

カールスルーエ・バーデン州立歌劇場 A・ジーガート新演出 グルック／「トーリードのイフィジェニー」公演

カールスルーエ・バーデン州立歌劇場でクリストフ・ヴィリバルド・グルックの後期の改革的オペラ「トーリードのイフィジェニー」がアリラ・ジーガートの新演出により上演され絶賛を博した。舞踊家、振付家、演出家であるアリラ・ジーガートは独自の表現と舞台語法を見出し、このオペラを犠牲者と難民のドラマとしてアクチュアルに物語っている。冒頭の嵐の場でアブストラクトに形成された舞台（ティロ・ロイター）の左右の岸辺にボロの普段着を着た遭難者たち（19名）が乗り上げる。彼らはアフリカやアラビヤの政治的、危機を孕んだ国々から逃亡した避難民たちである。そして敵国スキタイで祭司長として仕えているイフジェニー（表情豊かなメゾ・ソプラノのカタリーネ・ティール）が故郷ギリシャへ思いをはせる時、彼らも舞台に現れて故郷へ帰還を夢見るのである。

豈に図らんや、其処はトアス王が預言者の信託に従い外国人を皆殺しにしている〝死の島〟であった。やがて人間イフィジェニーの自主決定により神が定める生贄の仕来りも打ち破られ、弟オレスト（歌唱と演技が見事なアルミン・コラルチク）も悪夢から救われ幕となる。古代と現代を結び付けて演出したジーガートの細心且つ心理的に根拠づけたペルゾーネンレジーが見事である。クリストフ・ゲドショルドの指揮により劇的に要約されたグルックの音楽の中のあらゆる感情的な絡み合いが鮮明に描かれた。終演後、ジーガートはじめ出演者全員に熱狂的な喝采が浴びせられた。（7月15日、カールスルーエ・バーデン州立歌劇場）

因みにドイツでの避難民の受け入れは既に1990年から始められ、バーデン・ヴュルテンベルク州でも外国人労働者が一般社会に吸収されている。その内の19名がこの公演に参加した訳である。

カタリーネ・ティール（イフィジェニア）と岸に上陸した難民たち
（©Falk von Traubenberg）